



西堀耕太郎 Kotaro Nishibori

1974年和歌山県生まれ。地方公務員を経て、妻の実家「日吉屋」で京和傘の魅力に目覚め、職人の道へ。2004年、5代目に就任した。



この春から登場した、古都型-KOTORIのスタンダードタイプ ¥19,990

和傘に魅了され、最先端を追究する。



蛇の目傘 ¥25,200。豪華と並ぶ、昔ながらの一般的な和傘。内面の糸跡りも美しい。



西陣の「人形寺」こと宝鏡寺門前に店舗を掲げる。代々、茶道家元、表・裏千家の野点亭制作を手がける老舗。



京都府京都市上京区
寺之内通堀川東入
百々町546
☎075-441-0644
※10時～17時
※月
www.wagasa.com

洋傘の台頭で、日用品から伝統工芸品に変わってしまった和傘。今やその聞き方さえ知らない人が多い。「和傘作りは全国でも十数軒、京都ではたった一軒だけ」と知りながら結婚を機に自らこの僻居産業界に身を投じたのが、西堀耕太郎さんだ。当時「日吉屋」の年間売り上げは約100万円だったと言っ「けれど、創業百余年で培われた繊細な技術と最高の品質、何よりこんな美しい京和傘を、ここで絶やすわけにはいかなかったです。そこで、当主となった彼が目をつけたのは、和傘の骨組みの美しさ、陽にかざしたときの光の透過性。「思えば、日本に入ってきて千年、傘の歴史は革新の連続でした。だから僕がここで新しい進化をもたらすのもアリだ」。そして外部プロデューサーやデザイナーの協力を得て、新商品を生んだ。和傘の素材、仕組みを円筒形に展開することで世界に通用する美を実現した和風照明「古都型」だ。古都型が目指すのは、イサム・ノグチの「あかり」のように、長く愛される存在になること。「けれど、伝統的な京和傘作りも絶対的にやめません。日本文化の伝承者として、ルーツは忘れないでいたいんです」

清課堂 | Seikado

緻密な技術と時代の求める独創性を両輪で。



由緒ある寺町通りに開業。先代から今のスタイルになった。店内には、土瓶、茶室、和室を使ったギャラリーも。



代々作られてきた旧来の酒器と茶器の歴史も、時代に応じて少しずつ変化しているのだとか。左から、風字式茶心壺 ¥25,200、罌目茶心壺 ¥27,300、源兵衛徳利 ¥12,600。使いこむほどいい味が出る。



山中純平 Junpei Yamanaoka

1969年京都生まれ。大学で情報工学を学んだ後、家業を継ぐため父に辞事。2008年、「清課堂」山中源兵衛7代目となる。



京都府京都市中京区寺町通
二条下ル妙満寺前町462
☎075-231-3061
※10時～18時
※日、祭
http://www.seikado.jp

天保9（1838）年の創業以来、錫師として公家の御用も務め、神社に納める錫製神具を手がける。昨年代替わりしたばかりの「清課堂」は、代々引き継がれてきたそんな大切な役割を守りながら、現代にもしっかりと息を繋ぐ金属工芸品の老舗だ。明治の頃に生活工芸品の老舗だった錫製品も「ステンレスやアルミニウムの台頭で、日本人の生活からすっかり影を消えてしまいましたが」と語るのは、次世代の担い手、山中純平さん。そんな時代に、先代がシヨールームを設けて、販売にも力を注ぐようにした。酒器と茶器を得意とし、一般の人にも商品に触れてもらえる場所の誕生。「日々、お客さまの声に耳を傾けていたら、自ずと次になすべきことの答えが見つかってきた」と彼は言う。寸分違わぬ伝統技術を継承する一方で、市井の小さな声にも応えることも、時には時代を紡ぐ糸口となる。熱湯よりも冷やで飲む日本酒が主流となった現代、猪口よりもくいのみが求められる。弟子入りしてくる若手職人は、今や女性のほうが多い……。彼が変革していくのは、錫製品そのもののスタイルだけでなく、京の暖簾の「あり方」なのかもしれない。

日吉屋 | Hiyoshiya | 和風の照明



京和傘の構造、和紙の透過性と竹骨というシンプルながら洗練も通かしたランプシェード。傘のように展開すればコンパクトに収納可能な、シェードを灯風から外して、スタンドに設置できるのも魅力。2009年グッドデザイン賞を受賞。リヤダイフの展示会でも話題を浴びた。和風照明「古都型-KOTORI」ペンダント型（リヤダイフ）各 ¥89,800